

秋の田の  
かりほの庵の  
苔をあらみ  
わが衣手は  
露にぬれつつ

田子の浦に  
うら出でてみれば  
白妙の  
富士のたかねに  
雪は降りつつ

天の原  
ふりさけ見れば  
春日なる  
三笠の山に  
出でし月かも

春すぎて  
夏来にけらし  
白妙の  
衣ほすてふ  
天の香具山

奥山に  
紅葉踏み分け  
鳴く鹿の  
声聞くときぞ  
秋は悲しき

わが庵は  
都のたつみ  
しかぞすむ  
世をうら山と  
人はいふなり

あしびきの  
山鳥の尾の  
しだり尾の  
ながながし夜を  
ひとりかも寝む

鶺鴒の  
渡せる橋に  
置く霜の  
白きを見れば  
夜ぞふけにける

花の色は  
移りにけりな  
いたづらに  
我身世にふる  
ながめせしまに

これやこの  
行くも帰るも  
別れては  
知るも知らぬも  
あふ坂の関

筑波嶺の  
みねより落つる  
みながの川  
恋ぞつもりて  
淵ふちとなりぬる

立ち別れ  
いなばの山の  
峰みねに生おふる  
まつとし聞かば  
今いま帰かへり来こむ

和田わたの原はら  
八十島やそしまかけて  
漕こき出いでぬと  
人ひとには告つげよ  
あまのつりぶね

陸奥みちのくの  
しのぶもぢぢり  
誰たれゆゑに  
乱みだれそめにし  
我われならなくに

らはやぶる  
神代かみよもきかず  
竜田川たつたがは  
からくれなゐに  
水みづくくるとは

天あまつ風かぜ  
雲くものかよひ路ぢ  
吹ふきとぢらよ  
乙女をとめの姿すがた  
しばしとどめむ

君きみがため  
春はるの野のにいでて  
若菜わかな摘つむ  
わが衣ころも手に  
雪ゆきは降りつつ

住すみの江えの  
岸きしに寄よる波なみ  
よるさへや  
夢ゆめのかよひ路ぢ  
人目ひとめよくらむ

難波<sup>なにはがた</sup> 瀉<sup>あし</sup>  
短<sup>みじ</sup>かき 蘆<sup>あし</sup>の  
節<sup>ふし</sup>の間<sup>ま</sup>も  
逢<sup>あ</sup>はでこの世<sup>よ</sup>を  
過<sup>す</sup>ぐしてよとや

吹<sup>ふ</sup>くからに  
秋<sup>あき</sup>の草木<sup>くさき</sup>の  
しを<sup>し</sup>るれば  
むべ<sup>やまかせ</sup>山<sup>やま</sup>風<sup>かぜ</sup>を  
あらしといふらむ

名<sup>な</sup>にし負<sup>お</sup>はば  
逢<sup>あ</sup>ふさかやま  
逢<sup>あ</sup>坂<sup>さか</sup>山<sup>やま</sup>の  
ひと  
さねかづら  
人に<sup>し</sup>知られで  
くるよしもがな

わびぬれば  
今<sup>いま</sup>はた同<sup>おな</sup>じ  
難<sup>な</sup>波<sup>は</sup>なる  
身<sup>み</sup>をつくしても  
逢<sup>あ</sup>はむとぞ思<sup>おも</sup>ふ

月<sup>つき</sup>見<sup>み</sup>れば  
らぢに物<sup>もの</sup>こそ  
悲<sup>かな</sup>しけれ  
わが身<sup>み</sup>ひとつの  
秋<sup>あき</sup>にはあらねど

小<sup>せ</sup>倉<sup>くら</sup>山<sup>やま</sup>  
峰<sup>みね</sup>の紅葉<sup>もみぢ</sup>ば  
心<sup>こころ</sup>あらば  
今<sup>いま</sup>ひとたびの  
みゆき待<sup>ま</sup>たなむ

今<sup>いま</sup>来<sup>こ</sup>むと  
いひしばかりに  
長<sup>なが</sup>月<sup>つき</sup>の  
有<sup>あり</sup>明<sup>あけ</sup>の月<sup>つき</sup>を  
待<sup>ま</sup>ち出<sup>い</sup>でつるかな

このたびは  
ぬさもとりあへず  
手<sup>た</sup>向<sup>むけ</sup>山<sup>やま</sup>  
紅葉<sup>もみぢ</sup>のにしき  
神<sup>かみ</sup>のまにまに

みかの原<sup>はら</sup>  
わきて流<sup>なが</sup>るる  
いづみ川<sup>がは</sup>  
いつ見<sup>み</sup>きとてか  
恋<sup>こひ</sup>しかるらむ

山里は やまのあたりに

冬ぞさびしさ ふゆ

まさりける ま

人目も草も ひとめ くさ

かれぬと思へば おも

朝ぼらけ あさ

有明の月と ありあけ つき

見るまでに み

吉野の里に よしの さと

降れる白雪 ふ しらゆき

誰をかも たれ

知る人にせむ しひと

高砂の たかさご

松も昔の まつ むかし

友ならなくに とも

心あてに こころ

折らばや折らむ を

初霜の はつしも

置きまどはせる お

白菊の花 しらぎく はな

山川に やまがは

風のかけたる かぜ

しがらみは し

流れもあへぬ なが

紅葉なりけり もみぢ

人はいさ ひと

心も知らず こころ

ふるさとば ふる

花ぞ昔の はな むかし

香にほひける か

有明の ありあけ

つれなく見えし み

別れより わか

暁ばかり あかつき

憂きものはなし う

久方の ひさかた

光のどけき ひかり

春の日に はる ひ

しづ心なく しづこころ

花の散るらむ はな ち

夏の夜は なつ よ

まだ宵ながら よひ

明けぬるを あ

雲のいづこに くも

月宿るらむ つきやど

白露しらつゆに  
風の吹ふきしく  
秋あきの野のは  
つらぬきとめぬ  
玉たまぞ散ちりける

忍しのぶれど  
色いろに出いでにけり  
わが恋こひは  
物ものや思おもふと  
人ひとの同とふまで

逢あひ見みての  
後のちの心こころに  
くらぶれば  
昔むかしは物ものを  
思おもはざりけり

忘わすらるる  
身みをば思おもはず  
誓ちかひてし  
人ひとの命いのちの  
惜をしくもあるかな

恋こひすてふ  
わが名なはまだき  
立たちにけり  
人ひと知しれずこそ  
思おもひそめしか

逢あふことの  
絶たえてしなくば  
なかなかに  
人ひとをも身みをも  
恨うらみざらまし

浅茅生あさぢがの  
小野をのの篠原しのはら  
しのおれど  
あまりてなどか  
人ひとの恋こひしき

契ちぎりきな  
かたみに袖そでを  
しぼりつつ  
末すゑの松山まつやま  
波なみこそさじとは

哀あはれとも  
いふべき人ひとは  
思おもほえで  
身みのいたづらに  
なりぬべきかな

由良の門を  
渡る舟人  
かざを絶え  
ゆくへも知らぬ  
恋の道かな

みかきもり  
衛士のたく火の  
夜はもえ  
昼は消えつつ  
物をこそ思へ

明けぬれば  
暮るるものとは  
知りながら  
なほ恨めしき  
朝ぼらけかな

八重むぐら  
しげれる宿の  
さびしきに  
人こそ見えね  
秋は来にけり

君がため  
惜しからざりし  
命さへ  
長くもがなと  
思ひけるかな

嘆きつつ  
ひとりぬる夜の  
明くる間は  
いかに久しき  
物とかは知る

風をいたみ  
岩うつ波の  
おのれのみに  
くだけて物を  
思ふころかな

かくとだに  
えやはいぶきの  
さしも草  
さしもしらじな  
燃ゆる思ひを

忘れじの  
行末までは  
かたければ  
けふをかぎりの  
命ともがな

滝の音は  
絶えて久しく  
なりぬれど  
名こそ流れて  
なほ聞くえけれ

有馬山  
みなの篠原  
風吹けば  
いでそよ人を  
忘れやはする

いにしへの  
奈良の都の  
八重ざくら  
けふ九重に  
にほひぬるかな

あらざらむ  
この世のほかの  
思ひ出に  
今ひとたびの  
あふこともかな

やすらはで  
寝なましものを  
小夜ふけて  
傾ぶくまでの  
月を見しかな

夜をこめて  
鳥のそら音は  
はかるとも  
よに逢坂の  
関はゆるさじ

めぐり逢ひて  
見しやそれとも  
わかぬ間に  
雲がくれにし  
夜半の月かな

大江山  
いく野の道の  
遠ければ  
まだふみも見ず  
天の橋立

今はただ  
思ひ絶えなむ  
とばかりを  
人づてならで  
言ふよしもかな

朝あさぼらけ  
宇治うぢの川霧かはぎり

たえだえに

あらはれわたる  
瀬せせのあじろ木ぎ

春はるの夜よの

夢ゆめばかりなる

手枕たまくらに

かひなく立たむ

名なこそ惜をしけれ

さびしさに

宿やどを立ち出いでて

ながむれば

いづこもおなじ

秋あきの夕暮ゆふぐれ

恨うらみわび

ほさぬ袖そでだに

あるものを

恋こひに朽くちなむ

名なこそ惜をしけれ

心こころにも

あらでうき世よに

ながらへば

恋こひしかるべき

夜半よはの月つきかな

夕ゆふされば

門田かどたの稲葉いなば

おとづれて

蘆あしのまろ屋やに

秋風あきかぜぞ吹ふく

もろとも

あはれと思おもへ

山桜やまざくら

花はなよりほかに

知る人ひともなし

嵐あらし吹ふく

三室みむろの山やまの

紅葉もみぢ葉はは

竜田たつたの川かはの

にしきなりけり

音おとに聞きく

たかしの浜はまの

あだ波なみは

かけじや袖そでの

ぬれもこそすれ



高砂の  
尾上の桜  
咲きにけり  
外山の霞  
立たずもあらなむ

和田の原  
漕ぎ出でてみれば  
久方の  
雲居にまがふ  
沖つ白波

秋風に  
たなびく雲の  
絶え間より  
もれ出づる月の  
影のさやけさ

憂かりける  
人を初瀬の  
山おろしよ  
はげしかれとは  
祈らぬものを

瀬を早み  
岩にせかるる  
滝川の  
われても末に  
逢はむとぞ思ふ

長からむ  
心もしらず  
黒髪の  
乱れて今朝は  
物をこそ思へ

契りおきし  
させもが露を  
命にて  
あはれ今年の  
秋もいぬめり

淡路島  
かよふ千鳥の  
なく声に  
いく夜ねぞめぬ  
須磨の関守

ほととぎす  
鳴きつる方を  
ながむれば  
ただ有明の  
月ぞ残れる

思おもひわび

さても命いのちは

あるものを

憂うきにたへぬは

涙なみだなりけり

夜よもすから

物もの思おもふころは

明あけやらで

閨ねぢのひまさへ

つれなかりけり

難な波な江えの

蘆あしのかり寝ねの

いと夜よゆ息

みをつくしてや

恋こひわたるべき

世よの中なかよ

道みちこそなけれ

思おもひ入いる

山やまの奥おくにも

鹿しかぞ鳴なくなる

嘆なげけとて

月つきやは物ものを

思おもはする

かこら顔がほなる

わが涙なみだかな

玉たまの緒をよ

絶たえなば絶たえね

ながらへば

忍しのぶることの

弱よわりもぞする

永ながらへば

またこのごろや

しのばれむ

憂うしと見みし世よぞ

今いまは恋こひしき

村むら雨さめの

露つゆもまだひぬ

まきの葉はに

霧きりたらのぼる

秋あきの夕暮ゆふぐれ

見みせばやな

雄をしま鳥まのあまの

袖そでだにも

ぬれにぞぬれし

色いろはかはらず

きりぎりす  
鳴くや霜夜の  
さむしるに  
衣かたしき  
ひとりかも寝む

み吉野の  
山の秋風  
小夜ふけて  
ふるさと寒く  
衣うつなり

来ぬ人を  
まつほの浦の  
夕なぎに  
焼くや藻塩の  
身もこがれつつ

わが袖は  
潮子に見えぬ  
沖の石の  
人こそしらね  
かわく間もなし

おほけなく  
うき世の民に  
おほふかな  
わがたつ朶に  
墨染の袖

風そよぐ  
ならの小川の  
夕暮れは  
みそぎぞ夏の  
しるしなりける

世の中は  
つねにもがもな  
渚漕ぐ  
あまの小舟の  
綱手かなしも

花さそふ  
あらしの庭の  
雪ならで  
ふりゆくものは  
わが身なりけり

人もをし  
人もうらめし  
あぢきなく  
世を思ふゆゑに  
物思ふ身は

ももしきや

ふる古き軒端のきはの

しのおにも

なほあまりある

むかし昔なりけり